



異世界をスキルブックと 共に生きていく 3

ALPHAPOLETS

大森万丈

Banjou Umori

アルファライト文庫 

ラーナ

がいでう
闇組織「黒の外套」の一員。
ケンゴを始末しようとする。

クリスティーナ

エスネアート王国の
第三王女。

リン

元気な虎獣人の少女。
「スキル強奪」の
能力を持つ。

マリア

「予知」のスキルを持つ
狼獣人の少女。

ゴスー朗

ケンゴが最初に
召喚した魔物の一体。
進化してゴスリンクグ
になった。

さとうけんこ
佐藤健吾

本作の主人公。
元はサラリーマンだったが、
神様に「スキルブック」を
与えられて
異世界に転移した。

エレナ

きよてん
ケンゴの拠点を
取り仕切る少女。
ケンゴに心酔するあまり
時々極端な言動も……

戦争の終結と新たな火種

俺、佐藤健吾がこの世界に転移してから数カ月。

大森林に一人で放り出された俺は、そこで魔物と人が共存する拠点を築き上げたものの、もともと多くの人と関わるために人里に出ようと試みた。その道中、俺は『黒の外套』と呼ばれる野盗組織に誘拐されかけていたエスネアート王国の第三王女——クリステイナを救出したのだが、これがきっかけになって戦争に巻き込まれてしまう。

うちの拠点で魔物との通訳を務めるエレナが、クリス王女の身柄を要求し、それと引き換えにグラス帝国との戦争への助力を約束したのだ。いったいどうしてこうなった……

ナミラ平原での戦争では、帝国が召喚した勇者が率いるアンデッド軍団の圧倒的な数に押されて王国は大苦戦。俺も敵方の主力であるS級冒険者のエッジ達のパーティーに苦しめられ、仲間の命を危険に晒してしまった。これは大いに反省すべき点だ。

それでも、最終的には虎型獣人の女の子、リンのユニークスキルで勇者のスキルを奪い取り、無事に勝利できた。王国はこれから戦後の復興に忙しくなるだろう。

捕らえた帝国の勇者——村上君については、今回の戦で軍を率いたレルド王子立ち会いのもと、即座に尋問が行われた。意外にも、勇者は自分が中心となって今回の戦争を起したとすんなり自供した。目的は魔王の魔石と、レベル上げだそうだ。

帝国や王国に多くの犠牲を出したというのは、特にそれを気にした様子はない。信じ難いが、どこかゲーム感覚で戦争をやっている節がある。他にも彼と同年の勇者が召喚されたらしいけど、そいつらが最低限の常識を持った人物であってほしいと切に願う。

結局、勇者は一時的に俺が拠点で預かることになった。戦争の影響で王都は未だ混乱の渦中にあり、勇者を受け入れる態勢が整っていないからだ。

王国の部隊を魔道具の「転移門」で王都に送り届けた俺は、拠点に戻って久々にゆっくりした日々を送るのだった。

——戦争終結から一週間が経った。

新たに配下になったエッジ達のパーティーだが、エッジと魔法使いのマーリンは情報収集なども兼ねて、一度帝国に戻らせた。あの二人は冒険者として名が通っているし、いずれ役に立ってくれるだろう。一方、『契約魔法』の使い手リアムと、彼女が持っていた魔石から召喚したメルドとムランは、しばらく拠点で生活してもらうことにした。

さて、ここ数日、俺は今回の戦争で得た魔石や勇者から制御権を奪ったアンデッドを

使って、拠点の拡張や仲間達の強化に精を出している。

その一環で、拠点の戦力増強のために『エンチャント』というスキルを取得した。スキルポイントの必要値は300と高かったものの、非常に便利なスキルだ。『エンチャント』を使うと、魔石に自分が取得しているスキルを定着させられる。その魔石を組み込んで武器や防具、装飾品などを作れば装備した者も魔石に定着されたスキルを使えるようになるのだ。ただし、定着させられるスキルのレベルは『エンチャント』のレベルと魔石の等級に左右される。

具体的に言えば『身体強化』LV5を魔石に定着する場合は、『エンチャント』LV5が必要。そして等級が五の魔石にはスキルはLV5までしか付与できないといった具合だ。ちなみに、等級は一から十まであって、数字が低いほど上位になる。

まあ、魔石についてはいづれ良い魔石が見つかった時に更新していけばいいか。

さて、この『エンチャント』を俺の『スキルブック』と組み合わせると、非常に強力というか、便利になる。魔石に定着させるスキルを『スキルブック』で自由に選べるからだ。スキルがエンチャントされたアイテムを装着すれば、誰でもそのスキルが使えるので、俺みたいに多数のスキルを使いこなせる奴を量産できないかと思っただ、それは上手いかなかった。

どうやら色々と制限されているようで、エンチャントできないスキルも多数ある。『召

喚』や『付与』等の必要値が高いスキルは軒並みエンチャント不可だった。

また、各部位に一つずつしか効果が発動しないため、たとえば腕輪や指輪を一度に大量に身につけたとしても、多数のスキルを使えるわけではない。

とはいえ、これでみんなの装備を作れば、かなり拠点の戦力を強化できるはずだ。

プレゼントしたらみんな喜んでくれるだろう。そう考えていくつか作ってみたのだが……決定的な要素が欠けていた。

そう、俺のセンスだ。

最初に試作した腕輪はゴツゴツしていて、どう考えても女性がつけるデザインではなかった。

ゴブリンキングなる敵つい種族になったゴブ一朗であれば何も問題ないのだが、エレナ達年頃の女性にあげるには無骨すぎる。

本当はこう……女性がつけていて魅力が増すようなワンポイントの装飾品を作りたいのだけれど、俺が作るというかにも耐久性に優れたゴツいものになってしまう。何故だ……？

オシャレな見本でもあると助かるのだが、この拠点にはそんなものはないし、何より、なるべくサプライズでプレゼントしたい。

下手に弄ると変なのができそうなので、女性用は金属を細く編み込み、魔石をワンポイ

ントにするシンプルな腕輪で妥協することにした。

まあ、装飾品作りはこれから練習していこう。

そんなわけで、俺は早速拠点のメンバーを呼んでプレゼントした。

微妙な出来に声が出ないのか、みんな腕輪にじっと見入っている。

何度か作り直したからそんなに見映えは悪くないはずなんだけど……

狼獣人のマリアと虎獣人のリンには『索敵』と『身体強化』を。王都でお店の運営を頑張っている奴隷のランカ達は『鑑定』や『錬金』など、商売に役立ちそうなスキルを宿した物を用意した。

もちろん、エレナにもプレゼントする。彼女は我が拠点で最初の人間だし、いつも俺の側で頑張ってくれている。記念の意味も含めて、簡素なネックレスをあげた。

エンチャントしたスキルは『魔力増大』だ。

「これを本当に頂いても良いのですか？」

エレナはかなり驚いている。

「ああ、そのために作った物だからな。これからもよろしく頼む」

「ありがとうございます。一生大事にします」

「そんなに手の込んだ物じゃないし、気に入らなかつたらつけなくてもいいんだぞ？　い

ずれ凄^{すご}い彫金^{ちゆうきん}をしたやつを作る予定だから期待しておいてくれ」

「いえ、これがいいんです……」

エレナが受け取ると、何故か周囲から歓声が湧いたが、みんなどうしたんだ？

試作品とはいえ好評だったようで、エレナ達はそれぞれ受け取った装飾品を大事そうに身につけて、お互いに見せ合って盛り上がった。

そんな落ち着いた日々も束の間、俺の心を乱す出来事が発生した。

戦争勝利の功労者として、王都に招待されることになったのだ。

レルド王子直々の招待だから断るわけにはいかない。

王様との面会と、その後で戦勝祝いの宴があるらしいが……できれば祝いの席は目立ちたくないから、こぢんまりとしたのを希望したい。恐らく無理だろうけど。

「なあエレナ、本当にこの服じゃないと駄目なのか？」

王都に向かう馬車に揺られながら、俺は改めて自分の服装を確認する。

「はい、これくらいの装飾がある服がちょうど良いと思います。大丈夫です、似合っていますよ」

今俺が身につけている礼服は、現在拠点で採れる最高の素材から出来た糸で作られている。いつもの服とは違って生地^{きじ}の肌触り^{はださわ}は滑らかで、とても高級感があるのだが、無駄に装飾が多くて動きづらい。そして、着せられている感^{かん}が物凄^{ものすご}いのも難点だ。

エレナは似合っていると言うけど、いつも言動が極端なので信用できない。誰か俺を客観的に評価してくれる人間はこの拠点にはいないのだろうか？

あまりの恥^はずかしさから、道中誰とも出会わないことを願ひ、俺は馬車の中で大きな溜め息を吐いた。

「しかし、俺に比べてエレナはドレスが本当に良く似合っているな」

「ありがとうございます」

憂鬱な気持ちを誤魔化すように誉めると、エレナは頬を若干赤く染めながら頭を下げた。目の前に座るエレナは、燃えるような赤を基調とした細身のドレスに身を包んでいる。

その横に座るマリアとリンも、それぞれの髪の色に合った青系と黄色系のドレスを身に纏^{まと}っていて、こちらもとても可愛らしい。

祝いの席で何人か連れてきてもいいとのことなので、三人とも今日は護衛ではなくパーティーのお供として俺に同行している。

ぶっちゃけ、目立ちたくない俺の隠れ蓑として綺麗所^{きれいなところ}を連れてきた。

しかし、改めて見ると、エレナは本当に美人だな。召喚した当初はまだ幼さが残っていたが、レベルが上がリ、強化するたびにどんどん美しくなっている気がする。このまま強化の上限までいったらどこまで綺麗になるのだろうか？ 楽しみだな。

しばらく新たに作った装飾品のチェックなどをして時間を潰していると、エレナに声を掛けられた。

「ケンゴ様、あともう少しで王都に到着します」

「ああ、それじゃあ、降りる準備をしておくか」

俺は装飾品以外を仕舞いながら遠くに見える王都に視線を向けた。

一度馬車を降りた俺達は、王都に入るための検問の列に並んでいた。

以前来た時は誰もいなかったのが信じられないほどの人の列ができています。

「凄い人ばかりだな」

思わず呟いた俺に、エレナが応える。

「はい。周囲に王国が帝国を退けたという情報が広まりつつあるらしく、多くの人が戦勝国である王国に集まっているようです。これから数日、戦没者の追悼と戦勝祝いの祭りが

行われるそうなので、今後さらに増えると思われれます」

ほうほう、そういうことか。

「それにしても、なんでお前達の礼服はそんなにスタイリッシュなんだ？」

俺は振り返って王都に連れてきたメンバーの顔を見る。

今回はエレナにマリアとリン、それに元黒の外套の幹部で何かと対応力が高いジャックを連れてきた。さらに、先の戦争で俺達と戦ったSランク冒険者パーティーの一員であるリアムが一度王都を見てみたいと言いつ出したので、護衛のメルドを伴って一緒に来ている。いつも目立ちたくない俺に代わって、隠れ蓑として脚光を浴びてもらっている元山賊の冒険者——モーターン達のパーティーとは王都の中で合流する手筈だ。

それから忘れちゃいけないのが、あのアホ勇者。王国に引き渡すために連れてきているが、隙あらば何かしようとするので、逃げ出さないように『土魔法』で作った手枷で拘束してある。

改めてみんなの格好を見ると、俺の服だけが装飾過多な気がしてならない。女性陣のドレスはともかく、ジャックはスラリとシンプルな礼服で羨ましい。

『隠密』スキルのおかげで周囲の目は全てエレナやジャック達に向いているから別にいいのだが、似合わないかわかっている服を着るのはかなり恥ずかしい。

「なあ、何故俺だけこんな目立つ服装なんだ？ もう少しどうにかなかっただろ」

「主人であるケンゴ様が、一番良い服装をするのは当然のことです。もしケンゴ様が通常通りの服装で出席されるのであれば、部下である私達はそれ以下の格好で参列しなければなりません。それに、服装はそれを着ている人の第一印象を決める大事な要素です。ケンゴ様は周囲には認められていませんが、既に私達の国の主なのです。相手に見下されぬよう、対等以上の服装で臨まねばなりません」

エレナがたんたと理由を語った。

うーむ、そういうものなのだろうか？

国の代表者として振る舞ったことなんてないから、どうしたらいいか全然わからない。

抛点の外交関係を担う人物の採用を急いだ方がいいな。

「ご主人様、そろそろ替えの馬車に乗っていただけませんか？ ドレスアップした女性陣を衆目に晒し続けるのはあまり好ましくありません」

横からジャックに注意された。

「ジャックよ、俺にこれに乗れと言うのか？」

俺はすぐ後ろに停まっている馬車を振り返る。

そこには、さっきまで乗っていた普通の馬車ではなく、どこぞの貴族様のものかという雰囲気の下派手な馬車があった。

見た目が豪華な上に車体は大きく、何故か少し輝いて見える。馬も俺が召喚したものな



のか奴隷紋が入っており、レベルが上がっているらしく、妙に猛々しい。
 拠点でひっそり暮らしたい俺からすれば、遠慮したい乗り物ナンバーワンである。

「なあ、もう少し目立たない馬車はなかつたのか？ 幌馬車で十分なんだが……」

「駄目です。ご主人様はこの国の王に賓客として招待されています。周囲の目もありますし、王城に入るのにもそれなりの用意は必要です。さあ、ご主人様が乗らないとエレナさん達も乗れませんよ。それとも、ご主人様は彼女達を王城まで歩かせるおつもりですか？」
 「ぐっ……そう言われると乗らないわけにはいかないか……」

この世界のルールを知らない俺からしてみれば、ジャック達の言葉を尊重しなければならぬとわかってはいるのだが、どうも目立つようなことは気が引ける。

最初はただ人間と話がしたくて王国を目指していたはずなのに、なんで王様と話す羽目になるんだ。

ブツブツ文句を言いながらも、俺はジャックが用意した馬車に乗り込んだ

馬車が目立つおかげか、守衛にも怪しまれず、すんなり王都に入れた。

あとはモーテンを拾って王城に向かうだけなんだが、先ほどから馬車の中の空気が重い。

その理由は……

「なあ、俺はいつまでこんな扱いを受けるんだ？ 勇者だぞ？ そちら辺のモブと勘違いしてないか？」

王都の街並みを見た途端に不平を漏らしはじめた勇者に、エレナが冷たく言い放つ。

「いい加減、黙っていてもらえませんか？」

「ならさっさとこの手枷を外せよ。これ異様に重てえから疲れるんだよ。なあ、あんたからも言ってくれないか？」

勇者はエレナが取り合ってくれないとわかると、隣に座るジャックに話しかける。

こいつ、自分の状況を理解しているのか？ 最初と態度が全然変わらない。

「それは無理です。一応あなたは捕虜という立場ですからね。これから王国に引き渡すので、そこで待遇改善を要求してください」

まあ、無理だとは思うが。

「ちっ、面倒臭いな」

勇者は舌打ちすると、今度は俺に矛先を向けてきた。

「そういえば、他の勇者についてあれこれ聞いてきたが、あんたはこれからどうするんだ？ 日本に帰るのか？ あんたが魔王なら、あんた自身が死なない限り日本に帰るのは無理だろ」

勇者はどういうわけか、俺を魔王だと認識している。

「以前話した通り、私は日本で死んでいるので戻れませんよ。それに、私が死なないと戻れないとはどういう意味ですか？」

「そういえば前にそんなこと言ってたな。てか、どういう意味も何も、ラスボスを倒さないとクリアして元の世界に戻れないのは常識だろうが。皇帝もそう言ってたし、間違いないよ」

俺は勇者召喚については詳しく知らないが、誰かを殺したら元に戻るとか、ゲームではないのだから、その皇帝の勘違いじゃないのか？

とはいえ、一度元の世界に戻ったあと、再びこの世界に戻ってきた奴なんていないだろうし、実際どうなのか確認する術はない。

エレナ達も初めて聞く内容らしく、みんな驚いた顔をしている。

「ケンゴ様は一度死んだことがあるのですか？」

しばし馬車に揺られていると、突然エレナがそんなことを聞いてきた。

「ん？ ああ、話していませんでしたかもしれないけど、俺はこの世界に来る前に一度死んでいる。それがどうかしたのか？」

まさか、さっきみんなが驚いていたのは、勇者の話じゃなくてそっちなのか？

「いえ、ケンゴ様が一度でも死んだというのが信じられなくて……」

おいおい、俺をなんだと思っているんだ。

「俺もみんなと変わらないからな、人間死ぬ時は死ぬさ。それで村上君、その日本に戻れるという話には何か根拠があるんですか？」

「いや、そんなもんはねえよ。俺達はとりあえずその話を信じるしか選択肢がないから帝国にいただけだ」

ふむ、やはり根拠は何もないみたいだな。

「では、他に日本に戻る選択肢があれば、勇者の皆さんは帝国から離れる可能性があるというのですか？」

「その選択肢とやらが帝国を離れないといけないものならな。俺達は今、帝国では歓迎されてるし、余程のデメリットがない限り、離れないだろ」

まあ、そうだよな。とりあえず、俺達に実害がないなら、勇者やら魔王やらは国同士の話し合いでなんとかしてもらおう。

いずれ帝国に足を運ぶ機会があったら、他の勇者に会ってみるのもいいかもしれない。

「それで、俺はこれからどうなるんだ？」

「先ほども言いましたが、王国に引き渡します。後は王国との交渉次第ですね。ですが、あなたがしたことを考えると、あまり穏便には済まないと思った方がいいですよ」

勇者は事態の深刻さをまるでわかっているらしく、不機嫌そうに毒づく。

「ちっ、かつたるいいイベントだな。なあ、聞こうと思っていたんだが、あんた俺に何かしただろ？」

「何かとは？？」

「俺のステータスからスキルが消えてるんだよ。アンデッドも俺の言うことを聞かねえし、まさかあんたのスキルは強奪系か？」

「いえ、違いますよ。その虎型の獣人の子のスキルです。村上君は自分のステータスがわかるんですか？」

この世界の住人は魔道具を介さないとステータスがわからない。しかもレベルの表示がない不完全な情報しか得られない。

しかし、俺を含めてどうやら転移者は自分のステータスが確認できるようだ。

「わかるも何も、俺達は自分のステータスはいつでも確認できるぞ。あんたは違うのか？」

「いえいえ、私も自分のステータスに関しては見ることができますよ」

「そこら辺は俺達と一緒か。だけど俺達と違って、なんであんたはそんなに強いんだ？ 転移した時期はほとんど同じなんだよな？ 魔王は初期からステータスが良いのか？」

だから、誰が魔王だ。俺が魔王だという前提で話するのはやめてほしい。

「私も初めはかなり弱かったですよ。魔物を一匹倒すのにもずいぶん苦労しました」

「なら、その急成長が魔王の特性か。『経験値倍化』か『熟達』系の恩恵があるんだろ。ちっ、このチートが」

「いや、そんなものは持っていませんよ」

『スキルブック』のおかげで、スキルポイントさえあればどんなスキルでも最大レベルま

で一瞬で取得できるけど。とはいえ、地道に魔石を稼ぐ必要はあるから、万能ってわけじゃない。

「ご主人様、もうすぐモーテンとの合流場所に着きます」

しばらく勇者の相手をしていると、ジャックが声を掛けてきた。

モーテン達のパーティーには王女救出の手柄を肩代わりしてもらったり、王都復興のために冒険者ギルドが出した依頼の対応をしてもらったり、このところかなり負担を掛けている。怒っていないか少し不安だ。彼らは俺の隠れ蓑としてよく働いてくれるし、いづれ何かしらのお礼をしないとイケないな。

俺がモーテンの待遇について考えている間に目的地に着いたのか、馬車が停止した。

だが何か外の様子がおかしい。

馬車の窓から覗き込んで確認すると……外には人が溢れかえっていた。

戦争で疎開していた人が王都に戻ってきて活気が出ているのは知っていたが、目の前の光景はそれどころじゃなかった。

モーテン達と待ち合わせている広場は、集まった人で身動きがほとんど取れないくらいだ。

「おい、こつちに英雄モーテンがいるって本当か？」

「ああ、今回の戦争でも大活躍だったらしいぜ？ しかもその前は姫様を二人も救いだし

たらしいし、英雄って現実にいるんだな」

「あんた達、全然わかってないね！ モーテンさんが本当に凄いのは見返りを求めないところだよ！ 姫様を救った褒美も辞退されたらしいし、辺境の街アルカライムではお金がなくて依頼が出せない人達を助けて回っていたらしいよ！」

「モーテンさん！ 見てください！ モーテンさんに憧れて同じ場所に紋様を入れてみたんです！」

「モーテンさん握手してください！」

周辺に飛び交う声に耳を傾けてみると、全てモーテンの話題だった。

さすがの人氣っぷりだな。話に少し尾ひれがついている感じがするが、みんなそれを信じているようだ。

広場ではモーテン達が人々に埋もれて揉みくちゃにされている。これ、俺達と合流できるのだろうか？

「すみません！ 道を開けてください！ 私達はあの馬車に乗らないといけないんです！」

「これから王城に行かないといけないんだ、頼むからどいてくれ」

モーテンと仲間が声を張り上げて人混みを掻き分けるが、近くの人間しか聞こえていないのか、次から次へと人が押しかけてなかなか進めない。これが波状攻撃というものか……

「おい！ 聞いたか？ モーテンさん達は王城に行くらしいな！」

「戦勝の式典に呼ばれているんじゃないか？」

「それに見てみる！ モーテンさん達が乗るって言ってた馬車、そんじよそこの貴族様でも乗れないような豪華な馬車だぞ！ さすが英雄は違うな！」

その新たな情報で周囲の人間をさらにヒートアップさせる。

ああ、これは時間がかかるな。遅刻しなければいいが……

俺は窓の外で一生懸命奮闘しているモーテン達に同情しながら、長期戦を覚悟した。

あの後、俺達はなんとか無事にモーテンのパーティーと合流し、王城に向かった。今は控え室で待機しているところだ。

馬車に乗り込んだモーテン達の疲労感はもの凄く、これから式典に参加できるのか心配になるほどだ。あの人数に揉みくちゃにされたのだから当然だが、モーテンの話を知ると、彼らが王都を歩けば連日あの調子らしい。他にも、冒険者ギルドではこのところ俺が教えたレベルについての概念が普及しつつあり、それを鑑定可能なスキルを持つ彼らは引つ張りだこなのだそうだ。

そういうえばモーターテン達は元山賊の下っ端だったのだが、多くの人と関わっているせいかな、最近言葉使いが柔らかくなつたし、人との接し方も上手くなっている気がする。

苦情や悪い噂は一切聞いたことがない。

冒険者ランクもB級に上がったらしいし、今後彼らがどこまで行くのかが少し楽しみだ。

控え室に案内されて三十分も経たないうちに、迎えが来た。

「お待たせいたしました。陛下の準備が整いましたので、謁見の間へご案内いたします」準備の早さに驚きながらも席を立ち、案内する用人人について行く。

俺は歩きながら周囲を観察する。改めて見てもこの王城の造りはしっかりしているな。

華美な装飾はなく、意外と簡素な内装だが、重厚感がある。かなり年季が入っているのに破損や補修の跡が全然見当たらない。何か特別な方法で維持しているなら、拠点整備の参考になりそうだし、ぜひ教えてほしい。

「城の内装に興味がありますか？ この城は数千年前から存在していて、歴史的観点から非常に重要な建造物です。一度魔王に壊された時に復元されて以来、ずっとこの状態を維持しており、定期的な修繕や、状態保存は魔法で行っております」

俺があまりにキョロキョロしていたせいかな、前を歩く用人人が気を利かせて説明してくれた。

ありがたいのだが、そんなにあからさまだったのかと思うと、少し恥ずかしい。

「あそこに見える庭園は、遙か昔に召喚された勇者様が設計されたものですよ」

この用人人、余程王城に愛着があるのか、誇らしげな顔で細かい所まで色々教えてくれた。

王城の書庫や過去の勇者が作った物などが展示されている宝物庫などもあるらしく、興味をそえられる。立ち入りには許可が必要だそうなので入れなかったが、できれば、このままガイド付きで王城をくまなく見て回りたい。

用人人の話を聞いていると、あつという間に謁見の間に着いてしまった。

心の準備ができる前に、目の前の大きな扉が開かれる。

俺は意識を戻し、ジャック達に倣って姿勢を正す。

扉から奥までは赤い絨毯が一直線に続き、その両サイドに護衛の兵士や貴族と思しき者が並んでいる。そして、謁見の間の奥には豪華な椅子が鎮座していて、その両脇にレルドやクリスらの王族が立っていた。間違いなく、真ん中の椅子に座っている男性がこの国の王様だろう。

俺達は用人人に促され、謁見の間に入室した。

さて、どうしようか。

予想より遥かに人が多い。俺の顔を見たって何も面白くないと思うのだが……

しばらく固まっていると、使用人が小声で指示してくれた。

「どうぞ、陛下の御前にお進みください」

おっとと、そうだった。このままじっとしていても注目を集めるだけだしな。正直、作法がわからないから助かる。

俺は言われた通りゆっくり歩き、前方の椅子に座る男性に目を向ける。年齢は五十代くらいだろうか、顔に深く刻まれた皺から少し疲れているように見えるが、目の奥に宿る光には力が籠っていて、覇気みたいなものが感じられる。やはり一国の主というだけはある、俺とはえらい違いだ。

「そこでお止まりください」

まだ王様までは十メートルくらい離れているが、そこでストップを掛けられた。安全対策だとは思いますが、こんなに距離があると、かなり声を張らないと聞き取り辛そうだな。

確かこういう貴人との謁見の時は、あまりじろじろ見ない方がいいんだっけな。

俺はジャック達の所作を横目で窺いながら、見よう見まねで跪く。

「客人よ、よく来てくれた。レルドから話は聞いている。まずは自己紹介とこうか。私の名はグライブ・カートルド・ディーゼ・エスネアート。このエスネアート王国の王だ。貴殿の名は？」

クリスもそうだったが、相変わらず王族は名前が長いな。これ、絶対に覚えさせるつもりないだろ。

間違えたら不敬罪にされないか不安になる。

「私の名はサトウケングと申します。現在どこの国にも所属しておらず、大森林で拠点構築き、その代表をしています。何ぶん礼儀に疎いもので、無礼な物言いがあられるかもしれませんが、お許しただけると助かります」

俺が返事をする、先ほどまで静まり返っていた謁見の間にざわめきが広がる。早速何か失礼なことを言ったか？

「それについては構わん。気にせず、いつも通りにしてくれ。それにしても、レルドの言う通り話しかけたら本当に突然現れたな。何かタネがあるのか？」

なるほど、どうやら『隠密』のせいで俺の姿を認識できていなかったらしい。それが、返事をした時に急に出てきたように見えて、ざわついていたのか。

拠点のみんなは普通に対応するから、こういう反応をされるとびっくりする。

「タネはないですよ。どちらかと言うと体質ですかね。私は生まれつき影が薄いんです」

「そうか。大森林の者は森に紛れるのが得意と聞か、森がなくなるとも心配を殺せるとは珍しい。まあ、雑談はこれくらいにしておこう。先に伝えるべきことがあるからな」

「伝えるべきこと、ですか？」

「先の戦での貴殿の助力、まことに感謝している。貴殿のおかげで大勢の民が無事に今日を迎えることができた。ここに王国を代表して貴殿に感謝の言葉を贈る」

そう言って、王様は少しだけ頭を下げた。

しかし、参列している貴族達はこれが気に入らなかつたらしく、王の行為を諫める。

「陛下！ 頭をお上げください！ 王が軽々しく頭を下げては周囲に示しがつきません！」

「このような素性の知れぬ者に頭を下げる必要などありませんぞ」

謁見の礼儀や作法がわからないから普段通りに対応したのがまずかつたのだろうか？

王様も構わないって言ってたし、俺が何かやらかしそうな時は大抵ジャックかエレナが口を出してくるから、何も言われないなら問題ないのだと思っていたぞ。

「静まれ！ 私は誰も見捨てた我が国に救いの手を差し伸べてくれた恩人に礼を伝えただけだ。そのどこに問題があるのか？」

王の一喝を受け、不平を口にしていた者達が縮こまる。

「いえ、問題と言うわけでは……しかし、この者の邪悪な気配は……」

「私は王である以前に、純粹にエスネアート王国の一員だ。国を救われたことに比べれば、私が頭を下げるくらい取るに足りん。貴殿達の領地も、もしかしたら帝国のものになっていたかもしれぬのだぞ？ それでも頭を下げるべきでないと言うのか？ もう一度どういう状況か考えろ」

「はい……」

「……すまない、待たせてしまったな」

改めて、王様がこちらに謝罪した。

全然待つていないし、むしろ俺のせいで揉めたのなら、少し申し訳ないくらいだ。

「それで、貴殿の功績に対して褒美を与えたいのだが、その前に一つ確認しておきたいことがある。構わないか？」

確認しておきたいこと？ なんだろうか？

「ええ、構いませんよ」

「貴殿は何故助力の対価に我が娘の身を欲したのだ？」

ぐっ、まさか今この場でそれを聞かれるとは……

なんて答えよう……困ったな。

そもそも王女に悪魔のような提案を持ちかけたのはエレナだし、王女の身柄を要求したのも拠点（俺以外）の総意だったはずだ。俺はただ政治や外交に長けた人材が欲しいと思っただけなんだけどな。

恐らく、さつき周囲の者達の当たりがきつかったのは、俺みたいなよそ者が、若くて綺麗な王女を毒牙に掛けようとしているように見えているからだろう。

俺は慌てて念話でエレナに確認する。

(おい!? どうするんだ、この状況? 返答次第ではまずいんじゃないか?)
 (そうですか? こちらは相手の出した要求に相応の報酬として王女の身柄を求め、王女本人もその条件を呑んで約束を交わしました。何も問題ないと思いますよ。)

(だが相手は一国の王女だぞ?)
 (それでも、です。王女だからという理由で後になって約束を反故にするようでしたら、この国は信用なりません。そのままお話しください)

ふむ、そういうものなのだろうか? 王様にしたら王女は自分の娘なわけだし、大事にするのももつともだと思っただが……

とりあえず、俺はエレナに従って包み隠さず状況を説明する。

「素直に申しますと、私達の拠点では外交や政治に詳しい人材が乏しいのです。クリステイーナ様はその方面で優れた能力をお持ちのように感じただけで、戦争への助力の引き換えに、我が拠点に加わっていただけいかとお願いした次第です」

「ふむ、貴殿の言う通りならば、能力さえ持ち合わせていればクリス以外でも構わないように聞こえるが?」

(エレナ、どうなんだ?)

(能力だけを見るのであれば、他の者で問題ありません。ですが、私は彼女をこの目で見つて判断した上で拠点のゴブ一朗先輩達に推薦いたしました。現状、第三王女以上の能力を

持つ者が現れない限り、彼女を要求するのが一番だと思います。不必要に下手に出ると、今後の関係にも響きますので、毅然とした態度で臨むべきかと)

うーむ、俺は第三王女じゃなくても一向に構わないのだが、エレナがずいぶんと推してくる。

何かあるのだろうか?

とりあえず、話を進めようか。

「確かに、能力的には他に優秀な者がいればその人でも構いません。ただ、私達は第三王女の願いを聞いて今回の戦争に参加しました。王族が簡単に約束を反故にするような国と友好的な関係を築くのは難しいですね」

「……すまない、気分を害したのであれば謝罪しよう。今回の貴殿の働きに報いるために、娘が結んだ契約は間違いなく履行する。ただ、何故娘が求められたのか気になってな。ちゃんとした理由があるのであれば問題は——」

「いけません、陛下!! もう一度お考え直してください!!」

王様の言葉を遮って、広間に若い男の声が響き渡った。

見ると、貴族側の列に並んだ一人の男性が声を上げていた。

「陛下!! どの馬の骨ともわからぬ男にクリス様を引き渡すなど、おやめください!! 奴の顔をご覧ください!! 一見すると平凡ながら、目つきは普通じゃありません!! 間違

いなく何か企んでいる、妖しい目です。邪な考えでクリス様の身柄を得ようとしているに違いありません!!」

「おいおい、突然こいつは何を言い出すんだ？」

平凡な顔は否定しないが、目つきをとやかく言われたのは初めてだ。シヨックが大きい。しかし、俺が何か企むだつて？むしろ何も考えずとりあえず行動することが多くて、みんなに迷惑を掛けていくくらいだぞ。そんな立派な頭があるなら、俺は何度もエレナに怒られない。

口を挟んだ男を見て、王様が目を細める。

「口を閉じろ。貴様は確かクレイト伯爵の息子だったな。王の決定に意見するとは何事だ。その上、この国の恩人を侮辱するなど……処分される覚悟があつての物言いだろうな？」

「し、しかし!!!」

「貴様は王国が窮地に追い込まれていた時に何をしていた？この者は確かに娘を要求した。しかし、戦場でその力を示し、我が国を勝利に導いたではないか。さらに、二度にわたつてクリスの救出をなしたのもこの者だ。これだけの功績を、貴様は目つき顔つきだけで否定するのか？」

「いえ、私はそのようなつもりでは……」

「こうして面と向かつて話をしてても特に害意は感じられないし、レルドからの報告も問題

ないと聞いている。であれば、娘を渡すのに何の問題がある？」

「ですがクリス様のお気持ちは……」

「これは娘が自ら望んで結んだ契約だ。納得も覚悟もしている。むしろ、もしかしたら娘はこれから王国よりも安全な場所に行くことになるのかもしれないのだぞ。もう一度聞く、何が問題だ？」

「いえ、何も問題はありません……申し訳ありませんでした」

そう言うと、男はこちらを睨みながら列に戻っていった。

「ずいぶん食い下がったが、第三王女と関係のある人物なのだろうか？」

「すまなかつたな。気を悪くしないでほしい」

王様は一つ溜め息をついて、再び俺に謝罪した。

「いえ、当然のご懸念かと」

「娘の件とは別に、今回の貴殿の行いに対して褒賞を出そうと考えているのだが、何か望む物はあるか？」

褒賞か、突然そんなことを言われても急には出てこないぞ。

レルドもそうだし、ここの王族は何かと褒賞をくれる気がするな。これが上に立つ者の行動としては普通なのだろうか？

だったとしたらやばいぞ……うちの拠点では俺はみんなを無償で働かせ続けている。

どこのブラック企業も真っ青だ。これは早急に何か考えないとな。
 (王様が褒賞をくれるらしいが、何か欲しい物はあるか?)

俺の質問に対して、すぐにジャックから返事があった。

(いえ、ケンゴ様が望む物を要求するのがよろしいかと思えます)

(それが思い浮かばないんだよ。貸しにすると面倒臭そうだし、何か適当なものはないか?)

(ではいくつか。ご主人様の拠点の認知と対等で友好的な関係、王都にランカさん達が店を出すための土地と建物、拠点で流通していない作物や資材の調達優遇。この辺りが無難かと思えます)

(多くない?)

(ご主人様は国を滅亡の危機から救ったのです。問題ないかと)

そういうものなのだろうか? 調子に乗って複数お礼を要求したら印象が悪くないイメージがあるのだが……

俺がしばし逡巡していると、リアムが念話に入ってきた。

(ケンゴ様! 私もお願ひしてもいいのかな?)

(ん? リアムか。何か欲しい物があるなら全然構わないぞ、遠慮せずに言ってみろ)

(だったら、あの王様が座ってる椅子のもっと下の方に埋まってる魔石が欲しい)

(魔石? 何か反応があったのか?)

(うん、このお城に入ってからずっと。帰りたい。って声が聞こえてる。この子、普通の子より声が大きいから、どうしても気になるんだ)

俺にはさっぱり聞こえなかったが、リアムには魔石の声を聞く能力があるので、気になるのだろう。

(そうか。だったら試しに言ってみるか。帰りたい場所があるなら、帰してやりたいしな)

(うん! ケンゴ様ありがとう!)

(いやいや、まだどうなるかわからないぞ? ところで、その魔石が帰る場所ってのは、ここから近いのか?)

(うーん、私もわからないんだけど、チキユウって所みたい)

(チキユウって……地球か!? おいおいどういことだ?)

まさかこのタイミングで地球というワードを聞くなんで……

俺は王様の椅子の下を探るように視線を向ける。

(リアム、本当にその魔石は地球に帰りたいって言っていたのか?)

(うん、この子は地球に帰りたいと言わないから、間違いないよ)

この城に地球出身者の魔石があるとは思わなかった。しかも、何故か王様が座っている

椅子の下とか、変な場所に埋まっているし。

神様の話では数千年に一度地球人をこちらに送っていると聞いていたから、その魔石は前回の転移者の物かもしれない。考えても仕方ないので、とりあえず王様に聞いてみるか。「その褒賞は、なんでもいいのですか？」

「ああ、私にできる限り応えようと約束しよう。遠慮せずに言ってほしい」

「では、四つお願いしたいことがあります。まず、私の拠点と王国との間で対等で友好的な関係を築けるよう、私の拠点を認知していただきたいです。次に、王都で私共が作った品物売る商店を出すための土地と建物を用意していただけますでしょうか。また、いくつかの作物や資材等、物質の取引の優遇を。最後に、可能なら一つ融通していただきたい魔石があります」

「ふむ……大方問題はないが、質問しても構わないか？」

「ええ、どうぞ」

「貴殿の勢力と友好関係を結ぶのは問題ない。しかし、こちらが存在を確認していない拠点をすぐに認知するのは難しい。後日、監査官を派遣して内情を確認させてほしい」

「ええ、その程度であれば問題ありません」

「次に、貴殿らが作る品物を王都で売りたいとのことだが、それはどのような種類の物だ？ 物によっては規制を掛けねばならぬからな」

「基本的には魔道具関連と、糸や蜂蜜などの拠点で生産した素材、食料ですね。お土産としてその魔道具を持ってきたので、使ってみてください」

俺は懐から一つの腕輪を出した。

「それは？」

「これは『鑑定の腕輪』です。冒険者ギルドなどにもステータスが確認できる魔道具がありました。それよりもさらに詳しい情報や、レベルが見えるようになりました。腕に嵌めるだけなので、ギルドが運用している水晶よりも持ち運びやすいでしょう」

「ほう……レルド、すまんが、早速試してもらえないか？」

王様に言われて取りに来たレルドに、腕輪を渡す。

「ケンゴの言う通りのハイスベックな物であれば、何かしらの代償がありそうなものが……呪われていたりしないだろうか？」

レルドは警戒しながらも腕輪を身につける。

だいたい、呪われた物をお土産に持つてくるわけないだろ。

「おお、確かにステータスが見えるが……おい、この魔道具は壊れていないか？」

レルドは俺の方を見ながら首を傾けている。

ちゃんと動作確認したし、壊れているはずはないのだが……

「何か問題がありましたか？」

「ケンゴのステータスを見たのだが、表示されている名前や種族、説明などがデータメダ」

「データメダ？ ああ、それは私のスキルのせいですね。他の者を鑑定してみてください」
 恐らく『偽装』の効果だろう。俺の『偽装』はLV10あるから、それ以下のレベルの『鑑定』では正しくステータスが表示されない。

レルドは素直に周囲にいる別の者を鑑定しはじめた。

てつきり俺のスキルについて突っ込まれるかと思っただが、何も言われなかった。確かこの世界は相手のスキルを聞くのはマナー的に好ましくないんだっただな。『偽装』は説明し辛いから助かった。

「確かに、これは凄いな。人のスキルやステータスだけでなく、物の状態や説明まで見られるのか」

「ええ。たとえば、食料に毒が混入した場合でも一目でわかりますよ」

「それが本当なら、この魔道具はかなり有用だな。陛下もぜひお試ください」

そう言うと、レルドは玉座に近づいて王様に腕輪を手渡した。

「おお、確かにこれは凄いな！ しかし、この皆に表示されるレベルという数値はなんだ？ ステータスとは何が違うのだ？」

王様にも気に入ってもらえたようだが、彼もレベルという概念は知らなかったらしい。

「それは強さの基準と想ってもらえれば良いでしょう。肉体のレベルが上がるとステータスが向上しますし、スキルレベルが上がると効果が向上します。鍛えれば数値も上昇していきますので、自分が強くなっていくのが客観的にわかって便利です」

「それが本当なら、凄い発見だぞ。貴殿はこれほどの物を市場に流すのか？」

「いえ、売るのはもう少し効果を抑えた物にする予定です。ああ、もちろんレベルは測れますよ」

「ふむ、なら問題はないか。その魔道具の販売を開始次第、私達が優先的に購入することは可能か？」

「ええ、そのように手配しましょう」

「では、早急に土地と建物を見繕おう。この魔道具はきつと王国を変えるぞ。次に資材や物資については、大臣と話してもらおう。こちらにも用意できる物とできない物があるからな」

「こちらも、部下のジャックから後で詳しく伝えさせます。希少な物や高価な物などを大量に要求するつもりはないので、安心してください」

「よからう。最後に魔石か。いったいどのような魔石が欲しいのだ？ この城にある最上級の魔石といえば、昔勇者が討伐した風竜の物だな。そのことか？」

「いえ、違うと思います。私も素性は詳しくはわからないのですが、グライブ陛下が座つ

ている椅子の下に魔石が埋まっているようです。それに興味が——」

と、俺が言いかけたところで、王様の顔色が変わった。

即座にレルドが周囲にいた兵士を展開させる。

「全員!! その者を陛下に近づけるな!!」

全員抜剣し、俺に厳しい目を向けてくる。貴族の中にも剣に手を掛けたり、魔法を詠唱したりする者がいる。

突然どうしたんだ? ついさっきまで和やかなムードだったのに。

ひとまず俺は害意がないことをアピールするために両手を上げて王様の方を見る。

先ほどまでの友好的な表情は消え失せ、露骨にこちらを探るような視線に変わっていた。

「貴殿はどこでその話を聞いた?」

「話? なんのですか?」

「魔石の話だ。先ほど言っただろう? 封印したばかりの魔王の魔石片が欲しいと。この

王城内でもどこに封印したかは一部の者しか知らない極秘事項だ。もう一度尋ねる。貴殿はいったいどこでその話を聞いた?」

魔王の魔石片? 俺はただ地球出身者の魔石だから、王様に譲ってくれないか聞いただけなのだが……まさかそれが魔王の魔石だとは。本当は勇者の魔石の間違いじゃないのか?」

とりあえず、誤解を解くために説得してみよう。

「どこで聞いたのかと言われても、誰にも聞いていないとしか答えられません」

俺は今にも剣を抜き放ちそうなエレナとメルドを手で制止しながら、王様の質問に答えた。

「この魔石片は帝国の動きに備えて先日封印したばかりだ。一般に情報公開しているのは別の場所なのに、どうしてわかったというのだ。返答次第では、いかに我が国の恩人といえども拘束せざるをえない」

「そもそも、私はその魔石が魔王の物だとは知らなかったんですよ。たまたま私のスキルで感知したので、聞いてみただけです」

「本当か? 先ほども言ったが、この城には他に強力な風竜の魔石もある。貴殿の感知に引っかけり、要求した魔石が風竜ではなく魔王の魔石片というのは、少し都合が良くないか?」

確かに、不自然でこじつけっぽいけど、ここでリアムの能力を明かすと彼女に危険が及ぶ可能性があるから、なるべく伏せておきたい。

それに、魔石の声を聞いたなんて言ったら話が余計にややこしくなりそうだ。俺がスキルで見つけた体でいこう。

「私のスキルで判明したのは、それが魔王の魔石ということではなく、勇者と故郷を同じ

立ち読みサンプル はここまで